

石井 友菜

千葉県立中央博物館大多喜城分館

はじめに

印旛沼東岸に展開する千葉県下有数の大規模古墳群：公津原古墳群・龍角寺古墳群の動態は、下総龍角寺の造営に至るまでの前史として重要な意義をもつ。本発表では、とくに浅間山古墳造営以前における両古墳群の概要、およびこれまでの研究での論点と課題、近年の調査・研究からみた今後の展望について述べる。

1. 古墳群の概要

公津原古墳群は、江川と小橋川に挟まれた洪積台地上に所在し、計 128 基の古墳が確認されている。八代台古墳群、天王・船塚古墳群、瓢塚古墳群の三支群から構成され、4 世紀前半から 7 世紀にかけて造営されたと考えられる。中でも天王・船塚古墳群中には、群中最大の船塚古墳（墳丘長 86m）、前方後円墳の石塚古墳（墳丘長 35m）、天王塚古墳（墳丘長 63m）など 6 世紀代と目される大型古墳がある。

龍角寺古墳群は、印旛沼北東岸の台地上に所在し、計 115 基の古墳が確認されている。6・7 世紀を中心に造営されたと考えられ、発掘調査によって年代の明らかな 6 世紀代の古墳としては 101 号墳（墳丘長 25m）、112 号墳（墳丘長 26.5m）があり、7 世紀になって大型前方後円墳の浅間山古墳（墳丘長 78m）、列島最大級の方墳・岩屋古墳（一辺 78m）が造営された。

2. 両古墳群をめぐる論点

ともに「印波国造」の勢力基盤として並び称される一方、埴輪（[深澤ほか 1994](#)）や大型古墳の埴形（[田中 1975](#)）、埋葬施設（[永沼 1992](#)）

など様々な視点からの研究において、両古墳群の間には差異が指摘されている。最も注目されるのは、隆盛時期の差異である。公津原古墳群において 6 世紀前半を中心に大型古墳が造営されたのに対し、龍角寺古墳群は 6 世紀後半から古墳数を増し、7 世紀に浅間山古墳、岩屋古墳など卓越した規模の古墳が登場し、両古墳群間の優位性が逆転する。こうした隆盛時期の差異をもとに、印波国造職の交代（[杉山 1982・川尻 2003](#)）が論じられた。また甘粕健は、両古墳群にみられる差異をもとに「自然成長的な形成を思わせる」公津原古墳群と「人工的な色彩の強い」龍角寺古墳群と対比し、龍角寺古墳群を「弱小な在地勢力に挺入れをして大和政権が組織した軍事集団」と捉えた（[甘粕 1998](#)）。このように、龍角寺の造営と、それに関与したと考えられる 7 世紀の大型古墳の系譜や被葬者像を追求する上で、公津原古墳群・龍角寺古墳群の形成の契機や変遷過程、および両古墳群の差異をどのように捉えるかが論点となっている。

3. 両古墳群の研究における課題

両古墳群の研究におけるネックは、発掘調査によって副葬品が明らかな例が少なく、個々の古墳の年代推定、および古墳群の詳細な変遷過程の復原が困難なことにある。

公津原古墳群では、群中において検出された埴輪生産遺跡が船塚古墳へ埴輪を供給したことが確かめられており（[深澤ほか 1994・小橋 2010](#)）、6 世紀初頭～中葉の年代が想定されている。しかし、船塚古墳の埴形については前方後方墳・長方墳・前方後円墳と様々な見解があ

り、歴史的な位置づけが難しい。石塚古墳・天王塚古墳との前後関係についても見解が分かれており、群内における大型古墳の終焉については不明瞭な点が多い（千葉県教育振興財団・房総のむら 2009）。

一方、龍角寺古墳群中には浅間山古墳と同じ墳丘企画とされる前方後円墳があり（甘粕 1964・千葉県史料研究財団 2002）、浅間山古墳の系譜を考える上で重要だが、詳細な年代決定、古墳間の前後関係の決定が困難である。

6世紀代における両古墳群の動態、そして7世紀代の古墳への系譜を考える上で、上記のような資料的制約をどのように克服し、各古墳を歴史的に位置づけるかが課題となる。

4. 近年の調査・研究からみた今後の展望

龍角寺古墳群では、50号墳（墳丘長46m）の測量・地中レーダー探査が行われている（城倉・青笹 2015）。調査の結果、浅間山古墳との外形の共通性、および埋葬施設が箱式石棺である可能性が明らかになった。今後、龍角寺古墳群内の中小規模墳や、先行研究で類似性が示された群馬・栃木県域の古墳との比較から、浅間山古墳の系譜が明らかになる可能性がある。

公津原古墳群では、船塚古墳に埴輪を供給した生産遺跡で双脚人物が確認され、船塚古墳の長方形二重周溝という特徴とあわせ、武社地域との交流が古墳群の拡大の契機となった可能性が指摘されている（白井 2020）。

また近年、両古墳群の周辺地域において古墳の発掘例が増加している。こうした発掘の成果から、印旛沼を含む香取海周辺域における埴輪や箱式石棺の墓制への導入背景に、新たな権力集団の台頭が指摘されており（根本 2011）、公津原古墳群・龍角寺古墳群形成の契機として注目される。発掘調査の進展により、古墳群の形成の契機を、周辺地域の動態とあわせて考究できる状況になりつつある。

以上のように、浅間山古墳・岩屋古墳と周辺古墳との系譜関係の解明、他地域にみられる同時代の古墳との比較、古墳群形成の契機の追求といったアプローチにより、龍角寺造営に至る

までの過程を、より詳細に明らかにできる可能性がある。

おわりに

公津原古墳群・龍角寺古墳群の調査・研究は、東国における古墳の終焉、そして寺院の成立という古代史上の画期を考究する上で重要な情報を提供してきた。近年は、良好に保存されてきた古墳群を舞台に三次元測量や地中レーダー探査などの非破壊調査が進められており、これまで蓄積されてきた緻密な研究成果との照合による、新たな研究の展開が期待される。

引用文献

- 甘粕 健 1964「前方後円墳の性格に関する一考察」『日本考古学の諸問題』河出書房新社
- 甘粕 健 1998「龍角寺古墳群と下総の豪族」『龍角寺古墳群からみた古代の東国』千葉県史料研究財団
- 川尻秋生 2003「大壬部直と印波国造」『古代東国史の基礎的研究』塙書房
- 小橋健司 2010「船塚古墳と公津原埴輪生産遺跡」『房総の考古学』六一書房
- 城倉正祥・青笹基史 2015「千葉県栄町龍角寺50号墳のデジタル三次元測量・GPR調査」『WASEDA RILAS JOURNAL』3
- 白井久美子 2020「「印波」龍角寺古墳群とその時代」『千葉史学』76
- 杉山晋作 1982「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例—公津原古墳群とその近隣—」『国立歴史民俗博物館研究報告』1
- 田中新史 1975「前方後方墳の終焉」『古墳時代研究Ⅱ』古墳時代研究会
- 千葉県教育振興財団・房総のむら 2009『龍女建立—龍角寺古墳群と龍角寺—』
- 千葉県史料研究財団 2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県
- 永沼律朗 1992「印旛沼周辺の終末期古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
- 根本岳史 2011『船形手黒1号墳』財団法人印旛郡市文化財センター
- 深澤克友ほか 1994『千葉県教育振興財団研究紀要 15 生産遺跡の研究 4—埴輪—』千葉県教育振興財団